

# 阿蘇・黒川温泉、癒しのビジネス創生物語 どこにでもありそうで、どこにもない温泉まちづくり

東京藝術大学美術学部建築科 講師 博士(工学) 河村 茂

## 1. 温泉街の魅力向上

### ・黒川温泉の位置と、その魅力 山間の雑木林の中の温泉

黒川は、熊本県の東北部、大分県との県境付近の九重連山と阿蘇の外輪山の裾野に位置する標高 700m の山間の温泉地で、雑木林の中に僅か 20 数軒の小規模な旅館(部屋数 10~20)が埋もれるように、ひっそり佇んでいる(観光旅館協同組合の設立は 1961 年)。この黒川、全国に 3,157 ある温泉の中でも常に人気上位のブランド温泉で、最も予約が取りにくい温泉の一つである。その魅力は、なんといっても露天風呂につかり味わう、野趣に富んだ「癒し」の風情にある。

この日本の原風景ともいえる雑木林を主体としたモノトーンの景観、露天風呂の入口には苔を生した茅葺屋根の門、また軒先にはこの地方特産のトウモロコシがぶら下がり、阿蘇伝統の雰囲気醸している。実は、この田舎っぽい風景、自然にできたものではなく、お客様をおもてなしするため黒川的生活文化を拾い上げ、自然の風景を修復し、意識的に創り出したものである。



黒川温泉の位置



浴衣姿でブラブラ歩き



苔生す茅葺屋根 トウモロコシが下がる

黒川温泉は、元々、半農半営の療養型湯治場だったが、九州横断道路・やまなみハイウェイの開通(1964年)を機に、建築・設備に投資し観光温泉業へと専門化した。しかし、よかったのは3年間ほどで、その後は二度のオイルショックもあり客室は空室が目立ち、多額の負債を抱え沈み込み、若者がUターンして旅館経営を引き継ぐ1980年代までは悪戦苦闘の日々が続いた。

## 2. 癒しのビジネス創生、三本の矢

温泉再生の立役者となった旅館・新明館の経営者・後藤哲也は、全国の観光地を歩いた成果をもって「癒し」をテーマに、自ら金槌とノミを持って露天風呂づくりに入り洞窟風呂を編み出す。そうして黒川で一番繁盛する旅館経営者へと変身するが、長老達からは変わり者として嫌われた。そんな中、1983年当時、最も客が来ない旅館として評判だった旅館の若手経営者が、後藤のもとへ教えを乞いにやって来た。ここから黒川温泉物語は始まる。

「地方創生」支援プロジェクト



(1) 時代ニーズの把握と運命共同体化 成熟社会への転換 顧客のパーソナル化、癒しへの希求

・プロデュースチームの発足

1980年代を迎えると、温泉へのニーズも変化(客のパーソナル化、癒しを求め、自然の中で解放されたい)、これを受け後藤は温泉街の魅力向上はバラバラではだめで、全体像を描き皆で協力して取り組むことが重要と説く。この後藤イズムに共鳴した次世代を担う若手の旅館経営者達がチームを組み、後藤をアドバイザーに迎え、「黒川らしさ(山間の雑木林の中に小規模旅館が融け込み醸す「田舎っぼい」癒しの風情)」の創生をコンセプトに、団体客から個人・家族・友人仲間客を対象に、温泉街の立て直しに動く。即ち、黒川温泉全旅館は運命共同体と認識し「共生の理念」の下、ある部分は協働しある部分は競争する戦略を描き、「癒し」をテーマに、「露天風呂」、「入湯手形」、「雑木林」という三本の矢(戦術ツール)を設けてまちづくりに入る。

(2) 協働・競争による共生のまちづくり コミュニティ力の発揮

① 露天風呂の活性化 地域資源の有効・高度利用へ露天風呂を共同利用

組合は、県から補助金をもらい学識経験者を入れ組織した委員会を活用し1994年「温泉街全旅館で1旅館」というビジョンをリリース、温泉全体を大きな宿としブドウの房に見立て、「道は廊下、各旅館は部屋」と捉え、まちづくりを進める。まちの主要な廊下にあたる下川端通りは、客が下駄をひっかけ浴衣姿で安心してブラブラ歩きできるよう、ウォークアブルな道に仕立て直すとともに、温泉街の地域資源・露天風呂の有効・高度利用をめざし、露天風呂が備わっていない旅館も含め共同で利用できるようにした。これには反対者もいたが、プロデュースチームの提案を受け若手のやる気を引き出すべく組合長の決断で実現した。



黒川温泉エリア



入湯手形

「地方創生」支援プロジェクト



## ②入湯手形の導入 課金システムの適用、エリアマネジメント

露天風呂の共同利用を具体にするのが「入湯手形」である。この**地場の小国杉の間伐材**でできた手形(1,200円)には、3枚のシール(一枚400円)が貼ってあり、シール1枚の売り上げに対し250円を各旅館が受け取る。制作費が250円であるから残り200円が組合の収入(組合予算約2億円の73%を占める)となる。なお、この手形を使わないと各旅館毎に500円超とられる。

この手形は、1986年の導入から累計すると250万枚(シールは600万枚)を超える販売実績を誇る。組合では、この課金システムによる手形収入を主な財源とし、癒しの効果を高めるべく雑木林の整備や統一された共同看板の作成、旅館共通の下駄の購入や日曜朝市の開催など**エリア・マネジメント活動**に取り組む。そうして温泉街**協働による黒川らしさを感じる風景づくり**と、個々の**旅館毎の個性あるおもてなしサービスの競争**とが見事に調和・融合、黒川はいまブランド温泉地となっている。この入湯手形の課金システムを活用した癒しの新ビジネス創生事業は、今日、米国で流行している**B I D手法**(地域主体が特定地区を対象に地区内の資産所有者から強制的に資金を集め地域活性化事業を実施する仕組み)を用いた地域経営に近い。

## ③雑木林による田舎っぽい風情の演出 日本の原風景への回帰、故郷感

### ・全員参加で植樹運動、県も支援

最初のうちは旅館毎、山に分け入り木を採取していたが、そののちは**県から補助金**(毎年200万円を3年間支給)の交付を受けるなどして植樹運動を広げていった。また、この植樹にあわせ、街中の全ての看板約200本を撤去した。1987年のことである。

### ・街づくり協定、色彩の統一 モノトーン

2000年、まちの司令塔・ランドマークとなる風の舎(組合の事務所と地域の集会所、ビジターセンター)の建設と橋の架替えがテーマとなったとき、地域に暮らす住民も含め**黒川温泉自治会**(24軒28湯宿、地域住民約100戸)が組織され全員が参画、大学教授の助言また小国町やコンサルの支援を受け、「**街づくり協定**」が締結される。協定内容を紹介すると、①大規模な建築物は建てない、構造は木造とする、②主屋根の勾配は3/10~5/10程度で瓦葺き、③外観は木・土塀・漆喰、④色彩は無彩色・低彩色、屋根は黒・灰色・茶、外壁はこれに加え白・ベージュ、⑤サッシュ枠は黒と茶、⑥屋外広告物は必要最低限、黒字に白文字で統一、としている。黒川では、街並みの価値は細部に宿るとしガードレール、カーブミラー、自動販売機や消火栓、郵便ポストに至るまで色彩をコントロールしており、この地にそぐわない色を見かけることはない。

この協定内容を実現するため、自治会は小国町と連携し景観事前協議や、街なみ環境整備事業(町と街づくり協定を結んだ住民が相互に協力し、橋の修復や道路舗装、街並みの隙間への雑木の植栽などを行い景観形成を進める)への支援を受けるなどして、モノトーンの秩序ある心

「地方創生」支援プロジェクト



地よい風景を創り出していった。また、温泉街では河川浄化を目的に、石鹸やシャンプーも、よもぎ製の天然素材を用いるようになっている。



癒しの散歩道



野趣に富む露天風呂



手形が奉納された地藏堂

### 3. 繁栄の持続へ

黒川では、各旅館の浴衣をまとい全旅館共通の下駄をはき、**黒や茶を基調**とした**モノトーン**の街中を入湯手形を首に案内地図を片手にし、好みに応じ露天風呂を巡る、そんな**黒川スタイル**が客の求めに合致し、片田舎の湯治場は輝きを増し「全国ブランドの癒しの湯」へと変身した。

黒川温泉は、2002年日本経済新聞社主催の「**温泉大賞**」に、2003年には温泉街再生の立役者・後藤哲也が国土交通省の「**観光カリスマ**」に、また2006年にはこの地が国から「**地域ブランド**」の**第1号**に選出される。その後も黒川の景観、風景は、2008年に国土交通省の「**美しいまちなみ賞**」、2009年に土木学会「**デザイン賞優秀賞**」を受賞する。そうしたことを伝え聞き、今日ではアジア諸国や欧米からの来湯者も多い。現在、癒しのビジネス化に成功した黒川温泉の旅館稼働率は40～50%で、全国平均の25%を大きく上回る。宿泊客数はピークの2002年には約40万人、観光入込客数も約120万人を記録した。1970年代と比べると隔世の感がある。

#### ・伝説、物語の創造 持続的繁栄へ

この地の人々は温泉街の繁栄持続に向け、さらなる一手を打っている。それは伝説を生む温泉街の確立である。観光カリスマ・後藤哲也の伝説的活躍はもちろんのこと、まちに新しい物語が生まれ、それが伝説となっていけば、それを「一度は味わいたい」と多くの人々が、この地に足を運ぶようになる。組合では、そうしたことを狙い、例の入湯手形、使い終わった後は、この地の「**地藏堂**」に**奉納**するよう仕向けている。そうすることで「思い思い、願いが叶う」という伝説が生まれるかもしれない。ローマのトレビの泉(再訪)や真実の口(嘘をつかない誓い)、ヴェローナのジュリエッタの家(愛実る)のように・・・、そんなストーリーを描いて誘導している。

#### 参考資料

後藤哲也、松田忠徳：黒川温泉 観光経営講座 光文社新書 2005

後藤哲也：黒川温泉のドン後藤哲也の「再生の法則」 朝日新聞社 2005

黒川温泉観光旅館協同組合ホームページ <http://www.kurokawaonsen.or.jp/>

「地方創生」支援プロジェクト



百瀬伸夫：存亡の危機から全国1・2位に上りつめた黒川温泉 JAPAN SHOP 2015

<https://messe.nikkei.co.jp/js/column/cat454/120576.html>

黒川温泉物語ダイジェスト貸切温泉どっどこむ代表大竹仁一

[http://www.kashikiri-onsen.com/story\\_kurokawa.html#tab-1](http://www.kashikiri-onsen.com/story_kurokawa.html#tab-1)

街並み探報、第15回一体となって取り組む街づくり～黒川温泉～

[http://www.jutaku-sumai.jp/town/machinami/nakata\\_3.html](http://www.jutaku-sumai.jp/town/machinami/nakata_3.html)

OBT 人財マガジン 黒川温泉観光旅館協同組合 後藤健吾

[http://www.obt-a.net/web\\_jinzai\\_magazine/person/2007/11/post-32.html](http://www.obt-a.net/web_jinzai_magazine/person/2007/11/post-32.html)

#### 掲載写真等

黒川温泉の位置 <http://www.oyadokurokawa.com/access>

浴衣姿でぶらぶら歩き <http://ja.wikipedia.org/wiki/>

苔生す茅葺屋根 <https://messe.nikkei.co.jp/js/column/cat454/120576.html>

トウモロコシが下がる <http://www.jalan.net/yad328302/>

黒川温泉エリア <http://www.roten.or.jp/area/kurokawa/>

入湯手形 <http://www.kurokawaonsen.or.jp/letter/index>

癒しの散歩道 <http://www.kurokawaonsen.or.jp/>

野趣に富む露天風呂 <http://tabij.net/transfer/>

手形が奉納された地藏堂 [http://www.aso-kuju.jp/pav\\_oguni/03\\_kurokawaonsen.html](http://www.aso-kuju.jp/pav_oguni/03_kurokawaonsen.html)

<http://daichi4121.blog.fc2.com/blog-entry-293.html>

「地方創生」支援プロジェクト

